

国貞えがく

泉鏡花

青空文庫

一

柳を植えた……その柳のひとところ一処繁つた中に、清水の湧く井戸がある。……大通り四ツ角かどの郵便局で、東京から組んで寄越した若干金の為替かわせを請取うけとつて、三ツ巻まきに包んで、ト先まず懷中に及ぶ。

春は過ぎても、初夏はつなつの日の長い、五月中旬なかば、午頃ひるごろの郵便局は閑かんなもの。受附にもどの口にも他に立集たちつどう人は一人もなかった。が、為替は直ぐ手取てつとり早くは受取うけとれなかった。取扱いが如何いかにも氣長で、

「金額は何ほどですか。差出人は誰でありますか。貴下あなたが御当人なのですか。」
 などと問伸まのびのした、しかも際立きわだつて耳につく東京の調子で行る、……その本人は、受取口から見た処ところ、二十四、五の青年で、羽織はおりは着ずに、小倉こくらの袴はかまで、久留米くるめらしい緋かすりの袷あわせ、白い襯衣しゃつを手首で留めた、肥った腕の、肩あたりの辺まで捲まくり手で何とも以て忙しそうな、そのくせ、する事は薩張さつぱは抄はらぬ。態なりに似合あわず悠然ゆうぜんと落着おちつき済すまして、聊いささか権高けんたかに見える処ところは、土地の士族の子孫らしい。で、その尻上しりあがりの「ですか」を饒舌しゃべつて、時々じろ

じろと下目しために見越すのが、田舎漢いなかものだと侮あなどるなど言う態度の、それが明あきかに窓から見透みえく。郵便局員貴下きか、御心安おこころやすかれ、受取人の立田織次たつたおりじも、同国おなじくにの平民である。

さて、局の石段を下りると、広々とした四辻よつ辻に立った。

「さあ、何処どこへ行ゆこう。」

何処どこへでも勝手に行くが可よし、また何処へも行かないでも可いい。このまま、今度の帰省中転ころがつてる従姉いしこの家へ帰つても可いいが、其処そこは今しがた出て来たばかり。すぐに取つて返せば、忘れ物でもしたように思うであらう。……先祖代々の墓はかまいり詣きは昨日済きのうますし、久

しぶりで見たかった公園もその帰りに廻る。約束の会は明日あしただし、好きなものは晩に食べさせる、と従姉いしこが言つた。差当り何の用もない。何年にも幾日いくかにも、こんな暢気のんきな事は覚えぬ。おんぶするならしてくれ、で、些ちと他愛たわいがないほど、のびのびとした心地こころち。

気候は、と言うと、ほかほかが通り越した、これで赫かつと日が当ると、日中は早はやじりじりと来きそうな頃が、近山曇りに薄うつつりと雲が懸かつて、真綿まわたを日光に干ほすような、ふつくりと軽い暖かさ。午頃ひるごろの蔭もささぬ柳の葉に、ふわふわと柔やわらかい風が懸る。……その柳の下を、駈かけて通る腕車くるまも見えず、人通りはちらほらと、都で言えば朧おぼろ夜よを浮うれ出したような状さまだけれども、この土地ではこれでも賑にぎやかな町ぶんの分ぶん。城趾しろあしのあたり中なか空そらで鳶とびが鳴く、と丁

ど今が春の鰯を焼く匂がする。

飯を食べに行つても可、ちよいと珈琲に菓子でも可、何処か茶店で茶を飲むでも可、別にそれにも及ばぬ。が、袷に羽織で身は輕し、駒下駄は新しし、為替は取つたし、ままよ、若干金か貸しても可い。

「いや、串戲は止して……」

そうだ！ 小北の許へ行かねばならぬ——と思うと、のびのびした手足が、きりきりと緊つて、身体が帽子まで堅くなつた。

何故か四辺が視められる。

こう、小北と姓を言うと、学生で、故郷の旧友のようであるが、そうでない。これは平吉……平さんと言うが早解り。織次の亡き親父と同じ夥間の職人である。

此処からはもう近い。この柳の通筋を突当りに、真蒼な山がある。それへ向つて二町ばかり、城の大手を右に見て、左へ折れた、屋並の揃つた町の中ほどに、きちんと暮しているはず。

その男を訪ねるに仔細はないが、訪ねて行くのに、十年越の思出がある、……まあ、もう少し秘して置こう。

さあ、其処へ、となると、早や背後から追立てられるように、そわそわするのを、なり
 たけ自分で落着いて、悠々と歩行き出したが、取って三十という年紀の、渠の胸の騒ぎ
 よう。さては今の時の暢気さは、この浪が立とうとする用意に、フイと静まった海らしい。

二

この通は、渠が生れた町とは大分間が離れているから、軒を並べた両側の家に、別に知
 己の顔も見えぬ。それでも何かにつけて思出す事はあった。通りの中ほどに、一軒料理
 屋を兼ねた旅店がある。其処へ東京から新任の県知事がお乗込とあるについて、向つ
 た玄関に段々の幕を打ち、水桶に真新しい柄杓を備えて、恭しく盛砂して、門か
 ら新筵を敷詰めてあるのを、向側の軒下に立って視めた事がある。通り懸りのお百姓
 は、この前を過ぎるのに、

「ああつ、」といって腰をのめらして行つた。……御威勢のほどは、後年地方長官会議の
 節に上京なされると、電話第何番と言うのが見得の旅館へ宿つて、葱の噺で、東京の町へ
 出らるる御身分とは夢にも思われない。

また夢のようだけれども、今見れば麵麴屋パンになった、丁ちようどその硝子窓がらすのあるあたりへ、幕を絞くつて——暑すくなると夜店の中へ、見世みせものの小屋が掛かつた。猿芝居、大蛇、熊、盲め目の墨塗すみぬり——（この土俵は星の下に暗かつたが）——西洋手品など一ひと廓くるわに、草くさの花を咲かせた——表通りへ目に立つて、蜘蛛男くもおとこの見世物があつた事を思出す。

額ひたいの出た、頭の大きい、鼻のしゃくんだ、黄色い顔が、その長さ、大人おとなの二倍、やがて一尺、飯櫃形いびつなりの天窓あたまにチヨン鬘まげを載せた、身の丈たけというほどのものはない。額あごから爪先の生えたのが、金ぴかの上下かみしもを着た処ところは、アイ来た、と手品師が箱の中から拇指おやゆびで摘つまみ出しそうな中親仁ちゆうおやじ。これが看板で、小屋の正面に、鼠ねずみの嫁入よめいりに担かつぎそうな小さな駕籠かの中に、くたりとなつて、ふんふんと鼻息を荒くするごとに、その出額おでこに蚯蚓みみずのような横筋うねを畝うねらせながら、きよろきよると、込こみあ群集ぐんじゆを視ながめて控える……口上こうじよう言いがその出番に、

「太夫たゆういの、太夫たゆういの。」と呼ぶと、駕籠の中で、しゃつきりと天窓あたまを掉ふり立て、

「唯ただ今いま、それへ。」

とひねこびれた声を出し、頤あごをしやくつて衣紋えもんを造る。その身動きに、鼬いたちの香においを芬ぶんとさせて、ひよこひよこ行く足取あしどりが蜘蛛くもの巣を渡るようで、大天窓おおあたまの頸ぼん窪くぼに、附木つけぎ

ほどの腰板が、ちよこなんと見えたのを憶おも起おこす。

それが舞台へ懸る途端に、ふわふわと幕を落す。その時木戸きどに立つた多勢おおぜいの方を見向いて、

「うふん。」といつて、目を剥むいて、脳天から振ぶ下さつたような、紅あかい舌をぺろりと出したのを見て、織次は悚然ぞつとして、雲の蒸す月の下を家うちへ遁にげ歸かえつた事がある。

人間ではあるまい。鳥か、獸けものか、それともやつぱり土蜘蛛つちぐもの類たぐいかと、訪ねると、……その頃六十ばかりだった織次の祖母おばあさんが、

「あれはの、二股坂ふたまたざかの庄屋しやうや殿じや。」といった。

この二股坂と言うのは、山奥で、可怪あやしい伝説が少くない。それを越すと隣国への近路ちかみちながら、人界との境さかいを隔へだつ、自然のお関所のように土地の人は思うのである。

この辺あたりからは、峰の松に遮さへぎられるから、その姿は見えぬ。最もつと乾いぬいの位置で、町端まちはずれの方さがへ退ちかやまると、近山うしろの背後に海がありそうな雲を隔てて、山の形が歴然ありありと見える。：

：
汽車が通じてから、はじめて帰つたので、停車場ステーションを出た所の、故郷ふるさとは、と一見すると、石を置いた屋根より、赤く塗つた柱より、先ずその山を見て、暫時しばらく茫然ぼうぜんとしてイ

んだのは、つい二、三日前の事であつた。

腕車くるまを雇くつて、さして行くゆく従姉いとこの町より、真先に、

「あの山は？」

「二股ふたまたじゃ。」と車夫くるまやが答えた。——織次は、この国に育つたが、用のない町端まちはずれまで、小児こどもの時には行ゆかなかつたので、唯名ただに聞いた、五月晴さつきばれの空も、暗い、その山。

三

その時は何んの心もなく、件くだんの二股あおを仰あおいだが、此処ここに来て、昔の小屋の前を通ると、あの、蜘蛛大名くもだいみょうが庄屋しやうやをすると、可怪あやしく胸に響くのであつた。

まだ、その蜘蛛大名の一座に、胴の太い、脚の短い、芋虫いもむしが髪かみを結ゆつて、緋ひの腰布こしぬのを捲まいたような侏儒いっすんぼしの婦おんなが、三人ばかりいた。それが、見世ものの踊おどりを済おまして、寝しなに町の湯へ入る時は、風呂の縁ふちへ両手を掛けて、横りように脚あしでドボンと浸つかる。そして湯の中でぶくぶくと泳ぐと聞いた。

そう言えば湯屋ゆやはまだある。けれども、以前見覚えた、両眼りようがん 真黄色まつきいろな絵具の光る、

巨大な蜈蚣むかでが、赤黒い雲の如く渦うずを卷いた真中に、俵藤太たわらとうだが、弓矢を挟んで身構えた暖ぬ簾れんが、ただ、男、女と上へ割つて、柳湯やなぎゆ、と白抜きのに懸替かけかわつて、門かどの目印の柳と共に、枝垂しだれたようになつて、折から森閑しんかんと風もない。

人通りも殆ど途絶えた。

が、何処どこともなく、柳に暗い、湯屋の硝子戸がらすどの奥深く、ドブンドブんと、ふと湯の煽あおつたような響ひびきが聞える。……

立淀たちよどんだ織次の耳には、それが二股から遠く伝わる、ものの咄こたまのように聞えた。織次の祖母おおばは、見世物のその侏儒いつすんぼし おんなの婦を教おしえて、

「あの娘こたちは、蜘蛛庄屋くもしようやにカドわかされて、そのこしもとになつたいの。」

と昔語りに話して聞かせた所せい為いであろう。ああ、薄曇りの空低く、見通しの町は浮上うきあがつたように見る目に浅いが、故郷ふるさとの山は深い。

また山と言へば思出す、この町の賑かな店々の赫かつと明るい果はてを、縦筋たてすじに暗く劃くぎつた一條ひとすじの路みちを隔へて、数百すひやくの燈火ともしびの織目おりめから抜出ぬけだしたような薄茫うすぼんやり乎やとして灰色の隈くまが暗夜やみに漾ただよう、まばらな人立ひとたちを前に控えて、大手前おおもてまえの土塀どべいの隅すみに、足代板あじろいたの高座こうざに乗のつた、さいもん語りのデロレン坊主、但し長い頭髪かみのけを額ひたいに振分け、ごろごろと錫しゃくを鳴ら

しつつ、塩辛しおからこえ声して、

「……姫松ひめまつどのはエ」と、大宅太郎おおやのたろう光国みつくにの恋女房が、滝夜叉姫たきやしやひめの山寨さんさいに捕えら

れて、小賊しょうぞくどもの手に松葉燵まつばいぶしとなる処ところ——樹の枝へ釣上げられ、後手うしろでの脇ひじを空そらに、

反そりかえ返る髪を倒さかさに落して、ヒイヒイと咽むせんで泣く。やがて夫の光国が来合あわせて助けると

いうのが、明晩あくるばん、とあつたが、翌あくる晩もそのまま、次第に姫松の声こゑが渴かわれる。

「我が夫つまのう、光国どの、助けて給たまべ。」とばかりで、この武者修業の、足の遅さ。

三晩目みばんめに、漸やっとこさと山の麓ふもとへ着いたばかり。

織次おとこもづこは、小児心こどもこころにも朝から氣になつて、蚊帳かやの中でも髻ほうふつ髻ふつと蚊燵かいぶしの煙が来るから、

続けてその翌晩も聞きに行つて、汚きたない弟子が古浴衣ふるゆかたの膝ひざ切ぎな奴を、胸とこの処ところでだらりと

した拳固げんこの矢藏やそう、片手をぬい、と出し、人の願あこをしゃくうような手つきで、錢ねだを強請ねだる、

爪てのひらの黒い掌てのひらへ持つていただけの小遣こづかいを載のせると、目を睜みはつたが、黄色い齒はでニヤリとし

て、身体からだを撫なでようとしたので、衝つと極きまりが悪く退すさつた頸うなじへ、大粒うちな雨がポツリと来た。

忽たちまち大驟雨おおあうだちとなつたので、蒼あざくなつて駈出かけだして歸かへつたが、家うちまでは七、八町、その、

びしょ濡ぬれれさ加減かげん思おもうべしで。

あと二夜ふたよばかりは、空模様を見て親たちが出さなかつた。

さて晴れば晴れるものかな。磨^{みがきだ}出した良い月夜に、駒^{こま}の手綱^{きり}を切^{きり}放^{はな}されたように
飛出^{とびだ}して行つた時は、もうデロレンの高座は、消えたか、と跡もなく、後^{うしろ}幕^{まく}一重引^{ひとえ}
た、あたりの土塀^{われめ}の破目^{しろしろ}へ、白々と月が射した。

茫^{ぼつ}となつて、辻に立つて、前夜の雨を怨^{うら}めしく、空を仰^{あお}ぐ、と皎々^{こうこう}として澄渡^{すみわた}つて、
銀河^{りり}一帯、近い山の端^はから玉^{たま}の橋を町家^{まちや}の屋根へ投げ懸ける。その上へ、真白^{まつしろ}な形で、
瑠璃^{るり}色の透^すくのに薄い黄金^{きん}の輪郭した、さげ結びの帯の見える、うしろ向きで、雲のよう
な女の姿が、すつと立つて、するすると月の前を歩行^{ある}いて消えた。……織次は、かつ思
かつ歩行^{ある}いて、丁^{ちよう}どその辻へ来た。

四

湯屋^{ゆや}は郵便局の方へ背後^{うしろ}になつた。

辻^{あたり}の、この辺^{なかぞら}で、月の中空^{おんなまぼろし}に雲を渡る婦^{おんな}の幻^{まぼろし}を見たと思う、屋根の上から、城の大手^{おおて}
の森をかけて、一面にどんよりと曇つた中に、一筋^{ひとすじ}真^ま白^{しろ}な雲の靡^{なび}くのは、やがて銀河
になる時節も近い。……視^{なが}むれば、幼い時のその光景^{ありさま}を、目^ま前^{あたり}に見るようでもあるし、

また夢らしくもあれば、前世が兎であつた時、木賊の中から、ひよいと覗いた景色かも分らぬ。待て、希くは兎でありたい。二股坂の狸は恐れる。

いや、こうも、他愛のない事を考えるのも、思出すのも、小北の許へ行くにつけて、人は知らず、自分で気が咎める己が心を、我とさあらぬ方へ紛らそうとしたのであつた。

さて、この辻から、以前織次の家のあつた、某……町の方へ、大手筋を真直に折れて、一丁ばかり行つた処に、小北の家がある。

両側に軒の並んだ町ながら、この小北の向側だけ、一軒づもりポカリと抜けた、一町内の用心水の水溜で、石畳みは強勢でも、緑晶色の大溝になっている。

向うの溝から鱸によりり、こちらの溝から鱸によりり、と饒舌るのは、けだしこの水溜からはじまつた事であろう、と夏の夜店へ行歸りに、織次は独りでそう考えたもので。

おなじはやしやべ
同一早饒舌りの中に、茶釜雨合羽と言うのがある。トあたかもこの溝の左角が、合羽屋、は面白い。……まだこの時も、渋紙の暖簾が懸つた。

折から人通りが二、三人——中の一人が、彼の前を行過ぎて、フト見返つて、またひよいひよいと尻軽に歩行出した時、織次は帽子の底を下げたが、瞳を屹と、溝の前から、件

の小北の店を透かした。

此処にまた立留^{たちどま}つて、少時^{しばらく}猶^{ためら}予^{あた}つていたのである。

木格子^{きこうし}の中に硝子戸^{がらすど}を入れた店の、仕事の道具は見透^{みえす}いたが、弟子の前垂^{まえだれ}も見えず、主人^{あるじ}の平吉が半纏^{はんてん}も見えぬ。

羽織^{はでぐち}の袖口^{そでぐち}両方が、胸にぐいと上^{あが}るように両腕を組むと、身体^{からだ}に勢^{いきおい}を入れて、つかつかと足を運んだ。

軒^{のき}から直ぐに土間^{どま}へ入って、横向きに店の戸を開けながら、

「御免なさいよ。」

「はいはい。」

と軽い返事で、身軽にちよこちよこ茶の間から出た婦人^{おんな}は、下膨^{しもぶく}れの色白で、真中から鬢^{びん}を分けた濃い毛の束ね髪^{たばがみ}、些^ちと煤^{すす}びたが、人形だちの古風な顔。満更^{まんざら}の容色^{きりよう}ではないが、紺^{つつそで}の筒袖^{うわつぱり}の上被衣^{あきぎ}を、浅葱^{あさぎ}の紐^{むなだか}で胸高^{むなだか}にちよつと留^とめた甲斐^{かい}甲斐^{がい}しい女房^{たれ}ぶり。些^ちと気になるのは、この家^{うち}あたりの暮向^{くらしむ}きでは、これがつい通りの風俗で、誰^{たれ}も怪^{あや}しみはしないけれども、畳の上を尻端折^{しりばしより}、前垂^{まえだれ}で膝を隠したばかりで、湯具^{ゆぐ}をそのままの足を、茶の間と店の敷居^とで留^とめて、立ち身のなりで口早^{くちばや}なものという。

「何処^{どこ}からおいで遊ばしたえ、何んの御用で。」

と一^{いつこ}向^{むか}いのない、空^{くう}で覺えたような口^{こうじよう}上^{じやう}。言^{ことば}つきは慇^{いん}懃^{ぎん}ながら、取^{とり}附^つき端^はのな
い会^{かい}釈^{しやく}をする。

「私^{わたし}だ、立^た田^ただよ、しばらく。」

もう忘れたか、覺えがあらう、と顔^{かほ}を向^むける、と黒^{くろ}目^めがちでも勢^{せい}のない、塗^ぬつたような
瞳^{ひとみ}を流^{なが}して、凝^{じつ}と見^みたが、

「あれ。」と言^いいさま、ぐつたりと膝^{ひざ}を支^さいた。胸^{むね}を衝^つと反^{へん}らしながら、驚^{おどろ}いた風^{ふう}をして、
「どうして貴^{あなた}下^{した}。」

とひよいと立^たつと、端^{はし}折^よつた太^{ふくらはぎ}脛^{つづ}の包^{つつ}ましい見^み得^えものう、ト身^みを返^{かへ}して、背^{うしろ}後^ごを見^み
せて、つかつかと摺^{すり}足^{あし}して、奥^{おく}の方^{かた}へ駈^か込^こみながら、

「もしえ！ もしえ！ ちよつと……立^た田^た様^{さま}の織^{おり}さんが。」

「何、立^た田^たさん。」

「織^{おり}さんですかね。」

「や、それは。」

という平^{へい}吉^{きち}の聲^{こゑ}が台^{だい}所^{じよ}で。がたがた、土^ど間^{かん}を踏^ふむ下^げ駄^たの音^{おと}。

五

「さあ、お上り遊ばして、まあ、どうして貴下。」

とまた店口へ取つて返して、女房は立迎える。

「じゃ、御免なさい。」

「どうぞこちらへ。」と、大きな声を出して、満面の笑顔を見せた平吉は、茶の室を越した見通しの奥へ、台所から駈込んで、幅の広い前垂で、濡れた手をぐいと拭きつつ、

「ずっと、ずっとずっとこちらへ。」ともう真中へ座蒲団を持出して、床の間の方へ直しながら、一ツくるりと立身で廻る。

「構つちや可厭だよ。」と衝と茶の間を抜ける時、襖二間の上を渡つて、二階の階子段が緩く架る、拭込んだ大戸棚の前で、入ちがいになって、女房は店の方へ、ばたばたと後退りに退つた。

その茶の室の長火鉢を挟んで、差むかいに年寄りが二人いた。ああ、まだ達者だと見える。火鉢の向うに踞つて、その法然天窓が、火の気の少い灰の上に冷たそうで、鉄瓶

より低い処にしなびたのは、もう七十の上になろう。この女房の母親で、年紀の相違が五十の上、余り間があり過ぎるようだけれども、これは女房が大勢の娘の中に一番末子である所為で、それ、黒のけんちゅうの羽織を着て、小さな鬘に鼈甲の耳こじりをちよこんと極めて、手首に輪数珠を掛けた五十格好の婆が背後向に坐ったのが、その総領の娘である。

不沙汰見舞に来ていたろう。この婆は、よそへ嫁附いて今は産んだ忤にかかっているはず。忤というのも、煙管、簪、同じ事を業とする。

が、この婆娘は虫が好かぬ。何為か、その上、幼い記憶に怨恨があるような心持が、一目見ると直ぐにむらむらと起ったから——この時黄色い、でつぶりした眉のな顔を上上げて、じろりと額で見上げたのを、織次は屹と唯一目。で、知らぬ顔して奥へ通った。

「南無阿弥陀仏。」

と折から唸るように老人が唱えると、婆娘は押冠せて、
「南無阿弥陀仏。」と生若い声を出す。

「さて、どうも、お珍しいとも、何んとも早や。」と、平吉は坐りも遣らず、中腰でそわ

そわ。

「お忙しいかね。」と織次は構わず、更紗さらさの座蒲団を引寄せた。

「ははは、勝手に道楽で忙しいんでしてな、つい暇ひまでもございまするしね、怠なまけ仕事に板い前たまえで庖ほう丁ちようの腕前を見せていた所でしてねえ。ええ、織さん、この二、三日は浜いで鰯いわし

がとれますよ。」と縁えんへはみ出るくらい端近はしぢかに坐ると一緒に、其処そこにあつた塵ちりを拾つて、

ト首ひねを捻ひねつて、土間に棄てた、その手をぐいと掴つかんで、指もを揉み、

「何時いつ、当地こつちへ。」

「二、三日前さ。」

「雑ざつと十四、五年になりますな。」

「早いものだね。」

「早いにも、織さん、私わつしなんざもう御覽ごらんの通り爺じいになりましたよ。これじゃ途中で擦すれ違ちが

つたぐらいでは、ちよつとお分りになりますまい。」

「否いや、些ちつとも変らないね、相あいかわらず意気いきな人さ。」

「これはしたり!」

と天井てんじやう拔けに、突出つきだす腕かいなで額ひたいを叩たたいて、

「はつ、恐入おそれいったね。東京仕込じこみのお世辞せじは強い。人ひと、可加減いかげんに願ねがいますぜ。」

と前垂まえだれを横よこに刎はねて、肱ひじを突張つっぱり、ぴたりと膝ひざに手てを支ついて向直むきなる。

「何、串戯じようだんなものか。」と言う時、織次は巻まきた蓑たばこを火鉢ひばちにさして俯向うつむいて莞爾にっこりした。面色おももちは凜りんとしながら優やさしかった。

「粗末そまつなお茶でございます、直ぐに、あの、入いれかえますけれど、お一ツひと。」

と女房が、茶の室まから、半身みみを摺すらして出た。

「これえ、私わつしが事を意気な男だと言いいなさるぜ、御馳走ごちそうをしなけりや不可いかね。」

「あれ、もし、お膝ひざに。」と、うっかり平吉の言いう事も聞落ききおとしたらしかったのが、織次が膝ひざに落ちた吸殻すいがらの灰はじを弾はじいて、はつとしたように瞼まぶたを染めた。

六

「さて、どうも更あらたましては、何んとも申もうし訳わけのない御無沙汰ごぶさたで。否いえ、もう、そりや実からに、鳥からすの鳴かぬ日はあつても、お噂うわさをしない日はありませんが、なあ、これえ。」

「ええ。」と言いった女房の顔色の寂さびしいので、鳥ばかり鳴くのが分る。が、別に織次は噂

をされようとも思わなかった。

平吉は畳み掛け、

「牛は牛づれとか言うんでえしよう。手前が何しますにつけて、これもまた、学校に縁遠い方だったものでえすから、暑さ寒さの御見舞だけと申すのが、書けないものには、飛んだどうも、実印を捺しますより、事も大層になります処から、何とも申訳がございやせん。」

何しろ、まあ、御緩りなすって、いずれ今晚は手前どもへ御一泊下さいましようで。」と膝をすつと手先で撫でて、取澄ました風をしたのは、それに極った、という体を、仕方で見せたものである。

「串戯じゃない。」と余りその見透いた世辞の苦々しさに、織次は我知らず打棄るように言つた。些とその言が激しかったか、

「え。」と、聞直すようにしたが、忽ち唇の薄笑。

「ははあ、御同伴の奥さんがお待兼ねで。」

「串戯じゃない。」

と今度は穏かに微笑んで、

「そんなものがあるものかね。」

「そんなものとは？」

「貴下、まだ奥様はお持ちなさりませんの。」

と女房、胸を前へ、手を畳にす。

織次は巻蓑を、ぐいと、さし捨てて、

「持つもんですか。」

「織さん。」

と平吉は薄く刈揃えた頭を掉つて、目を据えた。

「まだ、貴下、そんな事を言っていますね。持つものか！ なんて貴下、一生持たないで
 どうなさる。……また、こりやお亡くなんなすつた父様に代つて、一説法せにやな
 らん。例の晩酌の時と言うとはじまつて、貴下が殊の外弱らせられたね。あれを一つ
 遣りやしよう。」

と片手で小膝をポンと敲き、

「飲みながら可い、召飯りながら聴聞をなさい。これえ、何を、お銚子を早く。」

「唯、もう爛けてござりえす。」と女房が腰を浮かす、その裾端折で。

織次は、酔った勢で、とも思う事があつたので、黙っていた。

「ぬたをの……今、私が播鉢に拵えて置いた、あれを、鉢に入れて、小皿を二つ、可いか、手綺麗に装わないと食えぬ奴さね。……もう不断、本場で旨いものを食りつけてるから、田舎料理なんぞお口には合わん、何にも入らない、ああ、入らないとも。」

と独りで極めて、もじつく女房を台所へ追立てながら、

「織さん、鰯のぬただ、こりや御存じの通り、他国にはない味です。これえ、早くしなよ。」

ああ、しばらく。座にその鰯の臭気のない内、言わねばならぬ事がある……

「あの、平さん。」

と織次は若々しいもの言いした。

「此家に何だね、僕ン許のを買ってもらつた、錦絵があつたつけね。」

「へい、錦絵。」と、さも年久しい昔を見るように、瞳を凝と上へあげる。

「内で困つて、……今でも貧乏は同一だが。」

と織次は屹と腕を拱んだ。

「私が学校で要る教科書が買えなかったので、親仁が思切つて、阿母の記念の錦絵を、古本屋に売ったのを、平さんが買戻して、蔵つといてくれた。その絵の事だよ。」

時雨の雲の暗い晩、寂しい水菜で夕餉が済む、と箸も下に置かぬ前から、織次はどうしても持たねばならない、と言つて強請つた、新撰物理書という四冊ものの黒表紙。これが必要れば学校へ通われぬと言うのではない。科目は教師が黒板に書いて教授するのを、筆記帳へ書取つて、事は足りたのであるが、皆が持つてゐるから欲しくてならぬ。定価がその時金八十銭と、覚えてゐる。

七

親父はその晩、一合の酒も飲まないで、燈火の赤黒い、火屋の亀裂に紙を貼つた、笠の煤けた洋燈の下に、膳を引いた跡を、直ぐ長火鉢の向うの細工場に立ちもせず、袖に繼のあたつた、黒のごろの半襟の破れた、千草色の半纏の片手を懷に、膝を立てて、それへ頬杖ついて、面長な思案顔を重そうに支えて黙然。

ちよつと取着端がないから、

「だって、欲^{ほし}いんだもの。」と言ひ棄てに、ちよこちよこと板の間^まを伝つて、だだッ広い、寒い台所^ゆへ行く、と向うの隅^{すみ}に、霜^{しも}が見える……祖母^{おばあ}さんが頭巾^{ずきん}もなしの真白な小さなおばこで、皿小鉢^{つめた}を、がちがちと冷い音で洗つてござる。

「買つとくれよ、よう。」

と聞^き分けもなく織次^{きざわ}がその袂^{たもと}にぶら下つた。流^{ながし}は高い。走りもとの破れた芥箱^{ごみばこ}の上^{うえし}を下^たを、ちよろちよろと鼠^{ねずみ}が走つて、豆洋燈^{まめランプ}が蜘蛛^{くも}の巣の中に茫^{ぼう}とある……

「よう、買つとくれよ、お弁当^{うめぼし}は梅干^{うめぼし}で可いからさ。」

祖母^{としより}は、顔を見て、しばらく黙つて、

「おお、どうにかして進ぜよう。」

と洗^{ひきかえ}いさした茶碗^{ちawan}をそのまま、前垂^{まえだれ}で手を拭^ふき拭^ふき、氷のような板の間^まを、店の畳^畳へ引返^{ひきかえ}して、火鉢^{ひきかえ}の前へ、力なげに膝をついて、背後^{うしろ}向きに、まだ俯向^{うつむ}いたなりの親父^{おや}を見向^{みむか}いて、

「の、そうさつしやいよ。」

「なるほど。」

「他の事ではない、あの子も喜ぼう。」

「それでは、母親、御苦労でございます。」

「何んのお前。」

と納戸へ入つて、戸棚から持出した風呂敷包が、その錦絵で、国貞の画が二百余枚、虫干の時、雛祭、秋の長夜のおりおりごとに、馴染の姉様三千で、下谷の伊達者、深川の婀娜者が沢山いる。

祖母さんは下に置いて、

「一度見さつしやるか。」と親父に言つた。

「いや、見ますまい。」

と顔を背向ける。

祖母は解き掛けた結目を、そのまま結えて、ちよいと襟を引合させた。細い半襟の半纏の袖の下に抱えて、店のはずれを板の間から、土間へ下りようとして、暗い処で、「可哀やの、姉様たち。私が許を離れてもの、蜘蛛男に買われさつしやるな、二股坂へ行くまいぞ。」

と小さな声して言聞かせた。織次は小児心にも、その絵を売って金子に代えるのである、と思つた。……顔馴染の濃い紅、薄紫、雪の膚の姉様たちが、この暗夜を、

すつと門かどを出る、……と偶ふと寂さびしくなつた。が、紅べに、白粉おしろいが何んのその、で、新撰物理書の黒表紙が、四冊並んで、目の前で、ひよい、と躍おどつた。

「待つてごさい、織おりや。」

ごろごろと静かな枢戸くるどの音。

台所を、どどんがたがた、鼠あれのが荒野と駈かけまわ廻る。

と祖母としよりが軒先から引返して、番傘ばんがさを持つて出直でなおす時、

「あのう、台所の燈あかりを消しといてくらつしやいよ、の。」

で、ガタリと門かどの戸がしまつた。

コトコトと下駄げたの音して、何処どこまで行くぞ、時雨しぐれの脚あしが颯さつと通る。あわれ、祖母としよりに導かれて、振袖ふりそでが、詰袖つめそでが、褌つまを取つたの、裳もすそを引いたの、鼈甲べつこうの櫛くしの照々てらてらする、銀かんざしの簪ゆらゆらの揺々するの、真白な脛はぎも露やみよわに、友染ゆうぜんの花の幻ふせいめいて、雨具やぶれめもなしに、びしやびしやと、跣足はだしで田舎やまちかの、山近やまぢかな町の暗夜やみよを辿たどる風情ふうせいが、雨戸やぶれめの破目もつろうを朦朧もつろうとして透すいて見えた。

それも科学の権威である。物理書というのを力に、幼い眼まなこを眩くらまして、その美しい姉様たちを、ぼつたて、ぼつたて、叩き出した、黒表紙のその状さまを、後のちに思えば鬼であろう。

台所の灯は、遙に奥山家の孤家の如くに点れている。

トその壁の上を窓から覗いて、風にも雨にも、ばさばさと髪を揺つて、団扇の骨ばかりな顔を出す……隣の空地の棕櫚の樹が、その夜は妙に寂として氣勢も聞えぬ。

鼠も寂莫と音を潜めた。……

八

台所と、この上^{あがり}框とを隔ての板戸^{いたど}に、地方^{いなか}の習慣^{なづかい}で、蘆^{あし}の簾^{すだれ}の掛つたのが、破れる、断^きれる、その上、手の届かぬ何年かの煤^{すす}がたまつて、相馬内裏^{そうまだいり}の古御所^{ふるごしよ}めく。

その蔭に、遠い灯^{あかり}のちらりとするのを背後^{うしろ}にして、お納戸^{なんどい}色の薄^{うす}い衣^{きぬ}で、ひとと板戸に身を寄せて、今出て行つた祖母^{としより}の背後^{うしろ}影^{かげ}を、凝^{じつ}と見送^{みおく}る状^{さま}にイんだ婦^{おんな}がある。

一目見て、幼い織次はこの現世^{うつしよ}にない姿を見ながら、驚きもせず、しかし、とぼんとして小さく立つた。

その小児^{こども}に振向^{ふりむ}けた、真白な氣高い顔が、雪のように、颯^{さつ}と消える、とキリキリキリ——と台所を六角^{ろっかく}に井桁^{いげた}で仕切つた、内井戸^{うちいど}の轆轤^{ろくろ}が鳴つた。が、すぐに、かたりと小皿

が響いた。

ながしところ
流の処に、浅葱の手絡が、時ならず、雲から射す、濃い月影のようにちらちらして、黒
ろかみ
髪のおくれ毛がはらはらとかかる、鼻筋のすつと通った横顔が仄見えて、白い拭布がひ
らりと動いた。

「織坊。」

と父が呼んだ。

「あい。」

ばたばたと駈出して、その時まで同じ処に、画に描いたように静として動かなかつた草
さいろ
色の半纏に裾附く。

「ああ、阿母のような返事をする。肖然だ、今の声が。」

と膝へ抱く。胸に附着き、

「台所に母様が。」

「ええ！」と父親が膝を立てた。

「祖母さんの手伝いして。」

親父は、そのまま緊乎と抱いて、

「織坊、本を買って、何を習う。」

「ああ、物理書を皆読むとね、母様のいる処が分るって、先生がそう言つたよ。だから、早く欲しかつたの、台所にいるんだもの、もう買わなくとも可い。……おいでよ、父

上。」

と手を引張ると、猶予いながら、とぼとぼと畳に空足を踏んで、板の間へ出た。

その登音より、鼠の駈ける音が激しく、棕櫚の骨がばさりと覗いて、其処に、手絡の影もない。

織次はわつと泣出した。

父は立ちながら背を擦つて、わなわな震えた。

雨の音が颯と高い。

「おお、冷え、本降、本降。」

と高調子で門を入つたのが、此処に差向つたこの、平吉の平さんであつた。

傘をがさりと掛けて、提灯をふつと消す、と蠟燭の匂が立つて、家中仏壇の薫がした。

「呀！世話場だね、どうなすつた、父さん。お祖母は、何処へ。」

で、父が一伍一什を話すと――

「立替えましよう、可^{あつたら}惜ものを。七貫や八貫で手離すには当りやせん。本屋じゃ幾千に買^いうか知れないけれど、差^{さしあた}当り、その物理書というのを求めなさる、ね、それだけ此^{ここ}処にあれば可^いい訳^{わけ}だ、と先ず言^いった訳^{わけ}だ。先^{さき}方の買^{かい}直^ちがぎりぎりの処^{ところ}なら買^{かい}戻^{もど}すとする。……高く買^いつていたら破談にするだ、ね。何しろ、ここは一ツ、私に立替えさしてお置きなさい。……そらそら、はじめたはじめた、お株が出たぜえ。こんな事に済まぬも義理もあつたものかね、ええ、君。」

と太^{ひど}く書生ぶつて、

「だから、気が済まないなら、預け給え。僕に、ね、僕は構わん。構わないけれど、唯^{ただ}立替えさして気が済まない、と言うんなら、その金子^{かね}の出来るまで、僕が預かつて置けば可^ようがしよう。さ、それで極^{きま}つた。……一ツ莞爾^{にっこり}としてくれ給え。君、しかし何んだね、これにつけても、小児^{こども}に学問なんぞさせねえが可^いいじゃないかね。くだらない、もうこれ織^{おり}公^{こう}も十一、吹^{ふい}ばたばたは勤まるだ。二銭三銭の足^{たし}にはなる。ソレ直ぐに鹿尾菜^{ひじき}の代^{だい}が浮いて出ようというものさ。……実^{じつ}の処^{ところ}、僕が小指^{レコ}の姉なんぞも、此家^{ここ}へ一人二度目妻^{にどめのさい}を世話しようといつてますがね、お互にこの職人^{しごともの}が小児^{こども}に本を買^いつて遣^やる苦勞をするよう

じや、末^{すえ}を見込んで嫁入^{きて}がないツき。ね、祖母^{としより}が、孫と君の世話をして、この寒空^{さむぞら}に水仕事だ。

因果な婆さんやないかい、と姉がいつでも言つてます。」……とその時言つた。

——その姉と言うのが、次室^{つぎのま}の長火鉢^{ところ}の処^{ところ}に來ている。——

九

そこへ、祖母^{としより}が歸つて來たが、何んにも言わず、平吉に挨拶^{あいさつ}もせぬ先に、

「さあ」と言つて、本を出す。

織次は飛んで獅子の座へ直^{なお}つた勢^{いきおい}。上から新撰に飛付^{とびつ}く、と突^{つん}のめつたようになって見た。黒表紙には綾^{あや}があつて、艶^{つや}があつて、真黒な胡蝶^{ちようちよう}の天鵝絨^{びろうど}の羽のように美しく：
一枚開くと、きらきらと字が光つて、細流^{せせらぎ}のように動いて、何がなしに、言いようのない強い薫^{かおり}が芬^{ぶん}として、目と口に浸^{しみこ}んで、中に描^かいた器械の図などは、ずっしり鉄^{くろがね}の楯^{たて}のように洋燈^{ランプ}の前に頭^{あたま}れ出^いでて、絵の硝子^{がらす}が燐^{ぼつ}と光つた。

さて、祖母^{としより}の話では、古本屋は、あの錦絵^{にしきえ}を五十銭から直^ねを付け出して、しまいに七

十五銭よりは出せぬと言う。きなかもその上はつかぬと断る。欲しい物理書は八十銭。何でも直ぐに買つて帰つて、孫が喜ぶ顔を見たさに、思案に余つて、店端に腰を掛けて、時雨に白髪を濡らしていると、其処の亭主が、それでは婆さんこうしなよ。此処にそれ、はじめの一冊だけ、ちよつと表紙に竹篋の折返し跡をつけた、古本の出物がある。定価から五銭引いて、丁どに鍰を合わせて置く。で、孫に持つて行つて遣るが可い、と捌きを付けた。国貞の画が雑と二百枚、辛うじてこの四冊の、しかも古本と代つたのである。

平吉はいきり出した。何んにも言うなで、一円出した。

「織坊、母様の記念だ。お祖母さんと一緒に行つて、今度はお前が、背負つて来い。」

「あい。」

とその四冊を持つて立つと、

「路が悪い、途中で落して汚すとならぬ、一冊だけ持つて来さっしやい、また抱いて寝るのじやの。」

と祖母も莞爾して、嫁の記念を取返す、二度目の外出はいそいそするのに、手を曳かれて、キッチンと小口を揃えて置いた、あと三冊の兄弟を、父の膝許に残しながら、出し

なに、台所を竊と覗くと、灯は棕櫚の葉風に自から消えたと覺しく……真の暗がりにも、もう何んにも見えなかつた。

雨は小止で。

織次は夜道をただ、夢中で本の香を嗅いで歩いた。

古本屋は、今日この平吉の家に來る時通つた、確か、あの湯屋から四、五軒手前にあつたと思う。四辻へ行く時分に、祖母が破傘をすぼめると、蒼く光つて、蓋を払つたように月が出る。山の形は骨ばかり白く澄んで、兎のような雲が走る。

織次は偶と幻に見た、夜店の頃の銀河の上の婦を思つて、先刻とぼとぼと地獄へ追遣られた大勢の姉様は、まさに救われてその通り天にのぼる、と心が勇む。

一足先へ駈出して、見覺えた、古本屋の戸へ附着いたが、店も大戸も閉つていた。寒さは寒し、雨は降つたり、町は寂として何処にも灯の影は見えぬ。

「もう寝たかの。」

と祖母がせかせかござつて、

「御許さい、御許さい。」

と遠慮らしく店頭みせさきの戸たをたたく。

天窓あまどの上でガツタリ音して、

「何んじや。」

と言う太い声。箱のような仕切戸しきりどから、眉の迫った、頬の膨ふくれた、への字の口して、小鼻の筋おとがから頤おとがへかけて、べたりと薄髯うすひげの生えた、四角な顔を出したのは古本屋の亭主で、……この顔と、その時の口惜くやしさを、織次は如何いかにしても忘れられぬ。

絵はもう人に売った、と言った。

見知越みしりごしの仁じんならば、知らせて欲ほしい、何処そこへ行つて頼みたい、と祖母としよりが言うと、ちよいちよい見懸ける男だが、この土地のものではねえの。越後えちごへ行く飛脚ゆだによつて、脚あしが疾はやい。今頃はもう二ふた股またを半分越したろう、と小窓に頬杖ほおづえを支つついて嘲笑あざわらった。

縁えんの早い、売口うれぐちの美しい別嬪べつびんの画えであつた。主ぬしが帰つて間まもない、店の燈あかりもと許へ、あの縮緬ちりめんぎもの着物を散らかして、扱帯しききも、襟えりも引ひき上げて見ている処ところへ、三度笠さんどがさを横よこつちよで、てしま莫莖ぼぎ、脚絆穿きゃはんばき、草鞋わらじでさつさつと遣やつて来た、足の高い大男が通りすがりに、じろりと見て、いきなり価ねをつけて、ずばりと買つて、濡ぬらしちやならぬと腰こしづけに、きりりと、上帯うわおびを結び添そえて、雨の中をすたすたと行方ゆくえ知れずよ。……

「分わつたか、お婆ばば々。」と言った。

十

断念めかねて、祖母が何か二ツ三ツ口を利くと、挙句の果が、

「老耄婆め、帰れ。」

と言つて、ゴトンと閉めた。

祖母が、ト目を擦つた帰途。本を持った織次の手は、氷のように冷めたかつた。そ

こで、小さな懷中へ小口を半分差込んで、圧えるように頤をつけて、悄然とすると、
辻の浪花節が語つた……

「姫松殿がエ。」

が暗から聞える。——織次は、飛脚に買去られたと言う大勢の姉様が、ぶらぶらと甘
干の柿のように、樹の枝に吊下げられて、上げつ下ろしつ、二股坂で苛まれるのを、
目のあたりに見るように思つた。

とやっぱり芬とする懷中の物理書が、その途端に、松葉の燻る臭気がし出した。
固より口実、狐が化けた飛脚でうて、今時町を通るものか。足許を見て買倒し

た、十倍百倍の儲もうけが惜おしさに、貉むじなが勝手なことを吐はきく。引受ひきうけたり平吉が。

で、この平さんが、古本屋の店へ居直つて、そして買かい戻もどしてくれた錦にしき絵えである。

が、その後、折を見て、父が在世ざいせいの頃も、その話が出たし、織次のちも後に東京から音信たよりを

して、引取ひきとろう、引取ひきとろうと懸合かけあうけれども、ちるの、びるので纏まとまらず、追おっかけて追

詰りつめれば、片音信かただよりになつて埒らちが明かぬ。

今日こそ何んでも、という意気込みであつた。

さて、その事を話し出すと、それ、案の定、天井てんじょう睨にらみの上うわ睡ねむりで、ト先そらず空惚とぼ

けて、漸やつと気が付いた顔がん色しよくで、

「はあ、あの江戸えど絵かね、十六、七年、やがて二ふた昔むかし、久しいもんでさ、あつたつけか

な。」

と聞きも敢あえず……

「ないはずはないじゃないか、あんなに頼んで置いたんだから。……」と何故なぜかこの絵が、

いわれある、活ける恋人の如く、容易たやすくは我が手に入らない因縁いんねんのように、寢覚いらいだめにも

懸念あせして、此家ここへ入るのに肩そびを聳そびやかしたほど、平吉がかかる態度に、織次は早いらだや躁立ち

焦あせる。

平吉は他処事よそことのように仰向あむいて、

「なあ、これえ。」

と戸棚の前で、膳だんごしらえする女房をあづで呼んで、

「知るまいな。忘れたろうよ、な、な、お前も、あの、江戸絵さ、蔵の中にあつたつけか。
」

「唯はい、ござりえす、出しますかえ。」と女房は判然はつきり言つた。

「難ありがと有う、お琴さん。」

とはじめて親しげに名を言つて、凝じつと振向くと、浪なみの浅葱あさぎの暖簾のれんごし越に、また颯さつと顔を
赧あからめた処ところは、どうやら、あの錦絵の中の、その、どの一人かに倅おもかげが幽すかに似通う。……

「お一つ。」

とそこへ膳なを直ちやうしして銚子ちやうしを取つた。変れば変るもので、まだ、七八ツ九ツばかり、母
が存ぞん生の頃の雛ひなまつり祭祭には、緋ひの毛氈もうせんを掛けた桃もも桜さくらの壇の前に、小さな蒔絵まきえの
膳だんに並んで、この猪口ちよくちほどな塗ぬり碗わんで、一緒に蜆しじみの汁つゆを替えた時は、この娘が、練物ねりものの
ような顔のほかは、着くるんだ花の友染ゆうぜんで、その時分から円まるい背を、些ちと背屈せきこみに座る
癖くせで、今もその通りなのが、こうまで変つた。

平吉は既^もう五十の上、女房はまだ二十^{はたち}の上を、二ツか、多くて三ツであろう。この姉だつた平吉の前^{ぜん}の家内が死んだあとを、十四、五の、まだ鳥も宿^よらぬ花が、夜半^{よわ}の嵐に散らされた。はじめ孫とも見えたのが、やがて娘らしく、妹らしく、こうした処^{ところ}では肖^{ふさ}しくなつて、女房ぶりも哀^{あわれ}に見える。

これも飛脚に攫^{さら}われて、平吉の手に捕われた、一枚の絵であろう。

いや、何んにつけても、早く、とまた屹^{きつ}と居直ると、女房の返事に、苦い顔して、横^{よこ}睨^らみをした平吉が、

「だが、何だぜ、これえ、何それ、何、あの貸したきりになつてはすだぜ。催促はするがね……それ、な、これえ。まだ、あのまま返つて来ないよ、そうだよ。ああ、そうだよ。」

と幾^{いくだび}度も一人で合点^{のみこ}み、

「ええ、織さん、いや、どうも、あの江戸絵ですがな、近^{きん}所^{じよ}合^{がつ}壁^{ぺき}、親類中の評判で、平吉が許^{とこ}へ行つたら、大黒柱より江戸絵を見い、という騒ぎで、来るほどに、集^{たか}るほどに、丁^{とん}と片^{かた}時も落着いていた験^{ためし}はがあせん。」

と蔵の中に、何とやらと言つた、その口の下……

「手前てまえじや、まあ、持物もちものと言つたようなものの、言わばね、織さん、何んですわえ。それ、貴下あなたから預かつているも同然な品なんだから、出入れには、自然、指垢ゆびあか、手擦てすれ、つい汚れがちにもなりやしやうで、見せぬと言えば喧嘩けんかになる……弱るの何んの。そこで先ず、貸したように、預けたように、余所よその蔵に秘しまつてありますわ。ところが、それ。」

と、これも気色けしきばんだ女房の顔を、兀上はげあがつた額ひたい越ごしに、ト睨やつて、

「その蔵持くらもちの家には、手前てまえが何でさ、……些ちとその銭式レコしきの不義理があつて、当分顔の出せない、といったような訳わけで、いずれ、取つて来ます。取つて来るには取つて来ますが、ついちよつと、ソレ銭式レコしきの事ですからな。

それに、織さん、近頃じや価ねが出ましたつさ。錦絵にしきえは……唯ただ一枚が、雑とあの当時の二百枚だつてね、大事のものです。貴下あなたにも大事のもので、またこつちも大事のものでさ。価ねは惜おしまぬ、ね、価ねは惜おしまぬから手放さないか、と何度なんたびも言われますがね、売るものですか。そりや売らない。憚はばかりながら平吉売らないね。預りものだ、手放して可いいものですかい。

けれども、おいそれとは今言つたような工合ですから、いずれ、その何んでさ。ま、ま、めし飲あがれ、熱い処ところを。ね、御緩ごゆつくり。さあ、これえ、お焼物やきものがない。ええ、間拔けな、ぬ

たばかり。これえ、御酒に尾頭は附物だわ。ぬたばかり、いやぬたぬたとぬたった婦だ。へへへへへ、鰯を焼きな、気は心よ、な、鰯をよ。」

と何か言いたそうに、膝で、もじもじして、平吉の額をぬすみ見る女房の様は、湯船へ横飛びにぎぶんと入る、あの見世物の婦らしい。これも平吉に買われたために、姿まで変ったのであろう。

坐り直つて、

「あなたえ。」

と怨めしそうな、情ない顔をする。

ぎよろりと目を剥き、陰な面で、

「これえ。」と言つた。

が、鰯の催促をしたようで。

「今、焼いとるんや。」

と隣室の茶の室で、女房の、その、上の姉が皺びた声。

「なんまいだ。」

と婆が唱える。……これが——「姫松殿がえ。」と耳を貫く。……称名の中から、

じりじりと脂肪あぶらの煮える響ひびきがして、腥なまぐさいのが、むらむらと来た。

この臭気しゅうきが、偶ふと、あの黒表紙くろひょうしに肖然そつくりだと思った。

とそれならぬ、姉様あねさんが、山賊さんぞくの手に松葉燵まつばいぶしの、乱るる、揺めく、黒髪くろかみまでが目前めさきに
ちらつく。

織次はげしは激げきくいった。

「平吉、金子かねでつく話はつけよう。鰯いわしは待て。」

青空文庫情報

底本：「鏡花短篇集」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年9月16日第1刷発行

1999（平成11）年3月15日第19刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十二卷」岩波書店

1942（昭和17）年4月初版発行

初出：「太陽」

1910（明治10）年1月号

※底本の親本は総ルビ。底本作成時にルビが取捨選択されています。

入力：今中一時

校正：青木直子

1999年12月16日公開

2005年12月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

国貞えがく

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>